

## 四、事務関係の部

### 山木事務官

#### 故山木武俊事務官略歴

故従六位勲六等、法学士、長崎医科大学事務官

明治三十六年五月二十六日山形県に生る

昭和二年三月明治大学法学部卒業

同年三月文部大臣官房会計課事務嘱託となる

昭和四年七月文部省属に任ぜらる

昭和十四年四月大臣官房会計課監査係長を命ぜらる

昭和十五年二月会計課決算掛長兼務を命ぜらる

昭和十六年六月長崎医科大学事務官に任ぜらる

叙高等官七等

昭和十八年二月叙正七位

同年八月叙高等官六等

昭和十九年二月勲六等に叙し瑞宝章を授けらる

昭和二十年八月九日大学本館事務官室において原爆の犠牲となり殉職

### 亡き人と語る

故山木武俊

妻山木節子

いたましい思い出の八月九日がありました。あの日から丁度十年。弱い私はまだ生き残っております。

あの当時「もし防衛の第一線にお立ちになられたあなたを失うようなことがあつたら私は自殺するよりほかありません。」と申上げたものでしたのに。

この前お会いした時あなたから転任のお話を承り、転任先は非常にお世話になつた大学のことでもあり、自分としても転任したいと思う。ついでには十二日そちら（疎開先）に行き、遅くとも十五日には赴任する予定だ、と申されました。

そのや先、八月九日の原爆！おそろしかつた長崎の様子を避難して来られる方々から聞きながら、やつと十三日の朝、一番の汽車で長女と共に、浦上についた時「あゝやつぱり駄目だった！」と思ひました。見渡す限り焼野ヶ原で、想像以上の惨事でした。「せめてお骨なり」と思つて病院の受付に行つて見たところ数名の学生が居りましたが、様子は全く判らず、どうしようかと思案している時、肅先生にお会いし、先生

のお蔭で、お怪我や火傷をしておられた国房先生にお目にかかり、色々あなたのお話を伺いました。そこへお見舞にいらつしやつた高瀬先生から、交り果てたあなたのお骨を頂きました。そして疎開先の小江に帰り、その後は何をする事もなく、たゞあなたを憶うことだけで涙の明け暮れでした。

或時、おもやの広い庭を眺めておりますと、まだ生れて聞もない四羽のヒヨコが母親に守られて歩いて行くのです、後になり先になりして子供を守りながらついてゆくめんどりの姿はその頃の感じやすい私の心に強く訴えるものがありました。それからです……女学校二年の長女、小学校五年の二女、一年の長男、四才の三女、

「今日一日あなたのお守りのもとに、四人の子はお腹いっぱい頂いて、今夜も安き眠りにつきました。」

幸い当時の文部省の方々や、長崎医大の方々のお骨折りで、父亡きあとも、みぢめな生活をしないで、皆元気で思い／＼の道を歩んで行くことが出来ました。

只今、長女は文部技官の妻で、一女児の母となりました。

二女は進学準備中

長男は高校二年

三女は中学一年

それに母上と妹と楽しく生活をつゞけております。

たゞ気になるのは未解決の御承知の「家の問題」と腫瘍のため私の体が少し弱っているくらいで当時のあなたのお苦しみになつたことを思い出しますと、ものゝかずではございません。お目にかゝれる日まで一生懸命

あなたの分まで母上につくし、子供の養育に専念いたしますから笑顔のあなたを想い出させて下さいませ。

白方事務官や佐藤又一さんにも随分お世話になりました。東大にいらつしやる北村包彦先生にもまたお世話になつて居るんですよ。どうぞうちのことには御心配なく、いつまでもいつまでも安らかでいられますように――

さようなら

節 子

## 原爆落下前および落下直後の状況

昭和二十年春以来、本土の主要都市および軍需工場は、しばしば空襲を受け、制空権はほとんど敵の手に渡つた。兵役に関係ある者は毎日のように一人一人召されて征き、大学の事務機構も遂に学校と病院が一本化され、男子に代つて女子が銃後を守るようになった。当時事務職員は輔仁会を含め二四五名、内女子は一一八名、応召二二名であつた。

敵機は大村の空廊を連日爆撃した。その時長崎市民は高処の見物だつた。しかし遂に、B 29は長崎市を空襲、三菱、長崎駅、大波止、大学病院、その他工場はつぎつぎと多大の損害を受け、市民は一丸となつて防衛に努めた。八月六日広島市に新型爆弾が投下されたという風説が伝わり、敗色が一層濃くなつた。東京より帰崎中、広島島の惨状を目撃した角尾学長は、八日職員学生を集めその詳細を報告した。しかし軍部は本土

決戦を期しその詳細を一般国民に知らせなかつたが、呪うべき八月九日が来た。

当日朝から空襲警報が発令され敵B29数十機の大編隊が市の上空を通過、十時過ぎ警報が解除され、人々はそれぞれの取場に帰つた。太陽は丁度頭上近くにあつた。十一時頃だつたらう、急に爆音が聞えて来た。敵一機野母方面より進入市の上空に差しかゝつた。皆はたかが一機位とあなどつていた。突然落下傘のようなものが松山町上空に投下され、瞬間ピカツと火柱がたち、同時にドカンという落雷のような地響がした。二三秒たつたか、ゴオツという物凄い爆風がありとあらゆるものを押しつぶし、辺りは砂煙に覆われ急に暗くなつた。木造の建物はマツチ箱を上から押さえたように斜に傾き、すべての樹木は一瞬にして根こそぎに倒れた。部屋の窓ガラスは粉微塵に飛び散り、書類棚、机、椅子等は滅茶滅茶に破壊され、書類は木の葉のように舞い上りいろいろな破片で部屋中は足の踏み場もない程散乱、梁がメリメリと音をたて頭上に覆いかぶさつた。梁の下敷となつて助けを求める声、うめき声があちらこちらから聞えてきた。人々は必死になつて脱出しようとあせつた。

かくて数時間後にはありとあらゆるものはすべて焼きつくされ、無事危機を脱出した者もつきつきと倒れ遂に事務関係職員一四七名(男七〇、女七七)の尊い生命を奪つた。

#### 学校勤務関係者の遭難状況

教務係の立川孝八郎(八月十五日自宅で死亡)、森野千都子(数日後自宅で死亡)、用度係の相川武夫(二三日後自宅で死亡)、出納係の本多

成利氏等外数人は倒潰した本館建物から這い出るように脱出した。法医学教室から脱出した国房教授は傷や火傷で不自由な体を引きずるようにして本館より学校正門に至る間に設けられた壕に待避した。ふと「助けてくれー」と悲痛な叫び声が出た。それは長身の山木事務官が事務官室の窓から救いを求める声だつた。国房教授も自分の身が不自由なため、眼前にいる事務官を救助する術もなかつた。やがて本館の各所から火の手が上がつた。事務官室も盛んに燃え出した。生身のまま火焰につまれてゆく事務官の叫び声も、いつしか建物のバリバリ焼ける音の中に消えていった。本館から脱出した出納の本多氏は、学校正門前の築山の処までたどりつき、丁度石にもたれるように仰向けに倒れ安らかに眠るように息を引きとつた。正門の何百貫もあろうかと思われる片側の石の門柱が爆風で土台から十五度ばかり離れて傾いていた。

当日雨天体操場裏の防空壕にある金庫の鍵の修繕を用度係長山本正太郎氏(後刻死亡)より命ぜられた機械場の吉村七賀重、矢島富士雄、山口当一(何れも健在)の三氏が壕内の臨時灯の下で作業をつづけていたが、突然せん光がひらめき爆風で三人は吹き飛ばされその場に昏倒した。それから何十分経過したかわからない。間もなくして吉村、矢島の両氏は山口氏の「あつ痛いく」といううめき声に目をさまして辺りを見たが、真の闇だ。壕の入口は爆風で埋められたのか出られない。三人は必死になつて出口をさがした。

「おーい。ぬけ穴があるから声をたよりに這つてこーい」と吉村氏の呼ぶ声の方向に這い出た。急に明るくなつたようだ。丁度図書館書庫(コンクリート造)の裏に出た。そのときは既に図書館の事務室、大講

堂、それに下側にある雨天体操場、学生集会所、そして本館はすべて焼きつくされていた。図書館の焼跡には女子を混じえた数人の屍体が黒焦になつていた。おそらく山口静夫、江崎ミツ、溝越親子、馬場節子、佐藤弘、永田熊太郎氏等であろう。集会所の食堂には輔仁会の福島悦子、川口貞子、深堀久枝氏等の、本館前には雑使婦の稲尾ソモ氏その他事務職員であろうか数名の屍体が横たわつていた。本館焼跡には大小様々の塗料のはげた金庫がぼつんと取り残され、弁当箱、湯呑茶碗等が散乱していた。教務係の金庫の下敷となつてゐるのは原身武氏ではなからうか、出納係の金庫の前には桂和七氏らしい屍体があつた。庶務係の瀬戸口国久、深山芳幹、松尾春子、福丸キミ子、本多康子、学生係の達木昭子、田中和子、教務係の平石喜美子、用度係の山本正太郎、赤野義祐、小川スチ、村山トシエ、前川君枝、林田静子、執行信子、土居ユキエ、早田マツ子、監査係の丸勢徳次、中島マサ子、小山幸子、比嘉ヨシ子、小柳クニエ、出納係の小佐々チエ子、山田トミ、小使室の梅津梅吉、山野源次郎氏等それに薬専の清木、杉浦教授その他薬専の学生と一緒に壕掘りをしてゐた医専教授松尾京哉、助教教授福井兼一氏（福井氏は八月十八日五島の自宅で死亡）等はどうかとなつたらうか。その場で即死したか、一応何人が脱出したか、見分けのつかない程黒焦げになつた屍体が十二、三横たわつてゐた。又破壊された交換台の前には永尾スエノ、深堀君子氏が受話器をつけたまゝの姿で横たわつてゐた。防空壕内で助かつた吉村、矢島、山口の三氏等と一時間ほど前まで空襲のことで話し合つてゐた機械場の大野多作、山口作太郎氏の二人は機械場の入口で、辻栄作、小川苗八氏らしい変り果てた姿が部屋の中に見受けられ、守衛室では本

田五三郎、黒田福馬氏の屍体が横たわつてゐた。又機械場附近では病院の小使篠崎保一郎氏が腸を露出して倒れてゐた。（二三日後死亡）

生理学教室裏の元射的場では、壕掘りをしてゐた薬専生徒の無数の屍体が横たわつてゐた、貯水タンクと薬専の中間にあつた配属将校室の焼跡にも二三の屍体が見受けられ、指揮刀を握つたまゝの姿は、おそらく谷本十三郎准尉であろう。氏は大村から通勤しておられたが、八日まで病氣欠勤中、わざ／＼死ぬため出勤したようなものでまことにお気の毒である。同室の雇岡田醇子、給仕山野シゲ子両氏も即死したものとされる。

木造二階建の薬専は既に焼失してしまつたが、未だ所々くすばつてゐた。破壊された機械類が散乱し、黒焦げになつた屍体がごろ／＼横たわつてゐた。小使の山本利吉、横瀬久吉、岩本偵吉、雇の内野輝子、井手篤子氏等は無事脱出したらうか。雇の松尾滝子氏は当日壕掘りをしてゐたとか、欠勤してゐたとか、はつきり判らないが、それらしい姿も見受けられない。おそらく脱出したであらう（松尾氏は数日後家族に見守られ死亡した由）

吉村氏等三人は燃え尽した大講堂の前で全身火傷した学生に出合つた。「自分は医専二年の海軍依託生です。すみませんが病院へ連れて行つてくれませんか」と哀願、学生を連れて病院の方へ向つた。病院の各病棟からはメラメラと火を吹き、街は一面の火の海と化した。全身火傷した人、衣類のぼろ／＼になつた人、夢遊病者のようにふらふらと歩く人、元氣な者は負傷者を背負つて、これらの人々は灼熱地獄から逃れるように穴弘法へ穴弘法へと避難した。

## 病院勤務関係者の遭難状況

「ゴオツ」という物凄い爆風が部屋中をかき廻した。大小様々の木の破片が人々の上に覆いかぶさつた。背中や腰を強く打たれた者、後頭部をガラスの破片で突きさされた者、瞬間皆は机の下にもぐり込んだ。これは一瞬の出来事である。「眼が見えない」と誰かが悲鳴をあげながら走り去つた様だ。患者係の友成氏は早速眼を開けたが何も見えない。「やられたなあ」と思いながらしばらく眼をつぶつて時をまつた。しばらくして辺りがぼんやり見え出した。「よかつた本当によかつた。」よく見れば部屋の中は爆風ですべてのものがひっくり返され、壁土やゴミの土煙がもう／＼と部屋中に充満していた。間もなくして、患者係の入口から白衣の人が三、四人走り込み、外に面した右の窓より脱出した。よく見れば先頭が古屋野先生だ。頭を怪我されたのか繻帯をしておられた。隣室の古屋野外科の外来からは待合せの患者さん達であろうか、戸棚のような重いもの下敷になつて、救助を求める悲痛な声が聞えてきた。爆風のため衣類がぼろ／＼になつて呆然と立っている人、頭を打ちわつて血塗磨になつている人、顔がドス黒く焼け爛れた人、この世の人とは思われない、その様相たるや全く物凄く、丁度よく見かける残酷な一幅の地獄図絵である。これらの負傷者を混じえた職員、学生、看護婦、附添人、それに患者が、後から後からなだれのように病院玄関から山の方へ逃れて行つた。同室の山南学、青木完、松田松五郎氏等その他数人の者はどうなつたろうか。辺りを見廻したが誰の姿も見えない。隣室の収入係室に這入つた友成栄次氏は、入口のオートメタルと入退院の窓口係の机と

の間に頭を負傷し失神して倒れている永田信子氏（健在）を発見、早速玄関前の広場にかつき出そうとしたが、先程背中に打撲傷を負つたためか意の如くならず、痛さをこらえやつと表へ連れ出した。玄関前の車庫で自動車の修理をしていた運転手の佐藤寅一氏は負傷して山の方へ逃れて行く姿が見受けられた。後頭部に硝子の破片が突きささり出血甚しくシャツを朱に染め玄関前で頭を押えて困つていた山南氏は、通りがかりの永井先生から、山南氏のゲートルで止血繻帯をしてもらい辛うじて調理所の上の芋畑へ逃れて行つた。丁度窓口で患者から料金を受取つていた松浦馬太氏は、余程のショックを受けたのか、「助けてくれ、助けてくれ」と叫びながら玄関の入口まで来たが倒れてしまつた。裏の収入係が氣になつて玄関に引返した友成氏は、松浦氏を発見、かつき上げようとしたが体重が重いのと背中痛みでどうすることも出来ない。附近には誰の姿も見えないので一応部屋の方へ松浦氏をよせ懇ろに合掌した。（松浦氏は後刻拒架で山の上へ運ばれ、その夜青木完氏に見守られ大変苦しみながら息絶えた）友成氏は二階に上つて見たが八角廊下が落ち込んで先には行けそうもなかつた。

レントゲン室の疎開跡の材木から三ヶ所ばかり火の手がチヨロチヨロ上つていた。これはいかぬと思つて部屋に引返し、バケツをもつて玄関から外道を廻ろうとしたが、病院下の民家は既に焰につままれ、熱風が吹き上げ焼けつくようだ。立木が倒れ細い道を塞いでいた。内科と耳鼻科の病棟の間から、ようやくにして現場にたどりついた。未だ火勢は強くなかつた。肝腎の水が附近に見当らない。耳鼻科の病棟から見知らぬ人が一人応援に来てくれた。あちこちでバケツ三四杯ばかり探し出し懸

命に注水したが、一向に消えそうもない。止むなく玄関に引返した。丁度洗濯場前の広場で、永井先生が、学生、看護婦を指揮し、負傷者の救出に當つておられた。友成氏もこれに合流した。そこには洗濯場の鈴木勸氏が倒れていたが、既に死んでいた。洗濯場の大友はつ氏は負傷したのか救護班に手当をしてもらつていた（その夜青木完氏に見守られ山上で死亡）。下からは民家の負傷者が続々上つて来た。顔の腫れあがつて変型した人、腕や脚の焼け爛れた人、衣類のぼろ／＼に破れた人、誠に悲惨な状況である。表の守衛室までの石畳の坂道には力つきた多数の人々が倒れていた。

間もなく本館にも火が移り猛烈な勢で火を吹き出した。洗濯場の前も危険を感じるようになった。永井先生の指揮で順次調理所裏手の小高い丘の上に負傷者を移した。容赦なく照りつける真夏の太陽。加えて熱風の中をあえぎあえぎ負傷者を背負つて山をよち登るのも大変だ。途中薬局の真野先生が腰に打撲傷を受けたのか非常に苦しんでいたので友成氏は上まで背負つてやつた。そこには頭に繻帯をした山南氏、顔が腫れ上つて苦しんでいる運転手の佐藤氏、それに顔の変型した守衛の原氏の姿も見受けられた。四方はすべてうめき声ばかりの修羅場だ。その中で軍服が血染めとなり、長い木の枝を杖にして指揮をとつておられる永井先生の姿は、まことに崇高なものであつた。何分にも先生の掌握下にあるものは僅か学生、看護婦合せて二三十人。これでは到底多人数の救助は不可能である。間もなく襲いきた紅蓮の焰も燃えるに任せねばならず、室内に取り残された負傷者をみすみす見殺しにすることはかえすがえすも残念である。鉄筋コンクリートの窓から吹き出す火勢の猛烈さは、と

ても手の施しようがない位だ。山の上の負傷者は口々に「水を呉れ、水を呉れ」と哀願した。しばらく永井先生も考えておられたが、「止むを得ん、飲ましてやれ」といわれた。友成氏は割れ徳利を見つけ出し水を探しに下つたが、綺麗な水が見当らない、ようやく何処からか探し出し少しづつ水を飲ましてやつた。皆な手を合わして喜んだ。

調理所では爆風で鉄窓が飛び、事務室と現場員休憩所の間の壁が倒れ、杉田弁蔵氏はその下敷となつた。調理場の板張にいた市川小夜子氏は、吹き飛ばされた鉄窓にあたり、血まみれになつて昏倒した。深堀エキ氏は調理所の出口から逃れようとしたが、出口が塞がつていたため、裏の窓から飛降りた瞬間、額に傷を負い、血まみれになつて裏の山へ逃れた。（穴弘法へ避難してから知人が川平の自宅まで背負つて帰り一週間後原爆症状があらわれ深堀病院で死亡。）川脇リク（後日城山の自宅で死亡）、山下実枝（後日整形外科の地下室で死亡）、中田ハルノ（後日川平の自宅で死亡）、塩本キミヨ氏（後日死亡）等は調理所を脱出した。尾上龜次郎、高塚アサノの両名は看護婦寄宿舎の炊事場で遭難、高塚氏は即死、尾上氏は汽缶部煙突の下まで逃れ死亡した。病院裏門の守衛龜本近六氏は、コンクリートの落下により、頭髮がベラツとはげ、血だるまになつていたにもかゝらず元氣であつた（八月十六日時津で死亡）。

洗濯場の上貞次氏は頭を負傷しながらも大変元氣で負傷者の救出に活躍していた。丁度調理所に行つた時、爆風で倒れた壁の下敷となり苦しんでいた杉田弁蔵氏（健在）を二三人で助けようとしていたが、余りに壁が重たく意の如くならなかつた。隣の事務室は盛んに燃えていた。上氏は何処からか丸太棒を拾つてきて満身の力でやつと壁を持ち上げ杉

田氏を救助した。(上氏は九月十二日時津の自宅で死亡した)。

機関部の西田和一郎氏(二十日後諫早の海軍病院で死亡)、市原啓次氏(後日死亡)、益永弘 氏(後日時津で死亡)等はそれぞれ負傷脱出、浜崎力太氏は、釜焚の現場で、深掘辰之助氏は風呂場に上半身を突込んで死んでいた。

木造建の輔仁会では堤善吉氏、地本鶴松氏が事務室で、甲斐安太郎氏、早淵ケイ氏、常田チヨ氏は現場でそれぞれ即死、平田マツノ氏は現場から脱出、洗濯場の下で家族に見守られながら息絶えた。辻義夫氏は病院前の漬物屋で遭難、自宅に辿りつき死亡。松尾恵美(八月十七日死亡)、松尾礼子(八月十四日死亡)等はそれぞれ負傷、危機を脱出した。輔仁会へ氷を運搬中の山口英一氏(十日後死亡)、松永清氏の両名は表守衛室の前で遭難、松永氏は即死、山口氏は負傷者に混じて何れかに逃れて行った。

当日大浦方面へ公用外出中の調理所の佐藤又一氏は、長崎駅まで引返したが、浦上方面には真黒い煙が立ちのぼって空を覆っていて、おびただしい人々が浦上方面からやつてくる、又こちらからも行こうとする。今のAGの下から駅前にかけては人の波だ。浦上方面から来る人を見れば無残に負傷した人達ばかりだ。着衣はほろ／＼、皮膚は焼けたぐれ、シャツの破れかと思れば背中から腹にかけて、皮膚がはげて、パタ／＼している。頭髮は皆焼け焦げている。まったく惨鼻の極、今その様子を表現する言葉もない。口々に「浦上は全滅だ」と云う。何とかして人波をくぐつて岩川町の裏道づたいにでも大宇へ行きたいと尋ねれば「とても通れない」と答える。人波にもまれながらもまごまごしているうちに誰

かが「ガスタンクが危い、爆発するぞ」と叫んだ。「危い／＼」と口々に叫んで群集は潮のように四方に散った。何時爆発するか判らないような危険な状況で非常線が張られたが、辛うじて非常線を突破、山ぞいに歩いて病院へ着いたのが午後一時半頃、病院の長坂の下にある守衛室は爆風で押しつぶされ、守衛の原寅一氏(八月十八日時津で死亡)は家屋の下敷となつて虫の息。佐藤氏は原氏を背負つて調理所の上の畠まで運び調理所の方へ急いで下つた。調理所の事務室からは白煙がもう／＼と出ていた。飛び込むようにして事務室に入った。外の材木が盛んに燃えていたが、これが飛火したのか机の上の書類がメラ／＼と燃え、手のつけようもなかつた。調理所の板張に血まみれになつて苦しんでいる市川小夜子氏を発見、「しつかりするんだ」とはげましながら抱き起し廊下に出ようとした。そこにも火が移り盛んに燃えていたので、バケツで消火に努めた。ふと見ると市川氏は地下室降口の手すりにもたれていた。それから何分たつたか市川氏の姿が見えない。手すりの処で下を眺めた。地下室にも既に火の手が廻っていた。猛火をくぐつて地下室に降り辺りを見廻した。機関部の早田喜八氏それに市川氏を発見したが、もはや息絶えていた。その時米倉が燃えているのに気がつき必死になつて消火に努めたが、とても消えそうもなかつたので、引返して調理所の裏に出て山へ逃れた。今まで無我夢中であつたがやつと落着いたとき足の疼痛を感じた。これは消火の際焼けたぐれた大豆の中に足を突込んで受けた火傷であろう。

三時過ぎだつたらうか、佐藤氏は急に家族のことが心配になり帰らうと思つたが、岩川町一帯は火の海で、とても行けそうにもない。調理所

に引返し薬缶に砂糖水を入れ再び山の上に避難した。そこは負傷者で一ぱいだつた。その中には薬局の松岡スナ氏もいた。佐藤氏を見て腹痛を訴え鎮痛剤を要求したが、どうする術もなかつたので水を少し飲みました。やつたが間もなく息を引きとつた。山の上で用度の青木完氏に出会つた。頭に繻帯を巻き、腰にガラスの破片が喰い入つたといつて手で腰を押さえていた。小使の太田黒氏はよく佐藤氏に協力し、二人で負傷者に砂糖水を飲ませてやつた。皆は非常に喜び元気をとりもどしたようだ。山南氏も永井先生にしてもらつた止血繻帯で出血が止つた関係か気分が大分よくなつたようだつた。

やがて夜が訪れた。街は一面の焼野原だ。だがまだあちこち燃えつゞけている処も見受けられ夜空が真赤になつていた。突然飛行機の爆音が聞えたと思つた瞬間、敵機が低空で頭上から山王神社の方向に向つて銃撃を加えた。幸い我々の場所は被弾を免がれたが、このため死傷者が相出たものと思はれ、彼等の非人道的行爲が怨み骨髄に徹し今に忘れることができない。

### 八月十日以後の状況

やがて夜が明けた。周囲は負傷者で一ぱいだつた。その中には角尾学長が負傷して担架にやすんでおられ、箆島、永井両先生が附添つておられた。調理所の佐藤氏は学長から命ぜられ永井先生と協力して炊き出しを始めた。近郊から救援隊が続々食糧を運んでくれた。

十日から調理所裏の防空壕前に仮本部を設け学長をこゝにお移しした。翌日から事務室を調外科の焼跡に移し、古屋野教授を学長代理として、

高瀬、影浦、調、佐野、清木各教授、木戸、佐藤、一ノ瀬助教授等に、事務は友成、鬼塚、一ノ瀬覚、佐藤、杉田氏等と学生、看護婦合せて十数名で陣容を整えた。

先生達は負傷者の治療に、事務職員は市内の電柱に仮本部設置の件を貼り出す連絡やら、生存者、死亡者の整理と遺族の方の応待、炊き出しの準備で夜遅くまでくたくたになるまで活躍した。三日目には久米米の陸軍病院から衛生隊が応援に来て本館焼跡で約一週間患者の治療を行つた。四、五日目には地方からの救援食糧がその始末に困る程あつたが、その後救援も止絶え、米も調味料も欠乏し初めた。本部では種々協議の結果、小児科の佐野教授が市役所へ物資の斡旋交渉に行かれることになり、佐藤氏から受領手続をきゝ米五俵、味噌一樽、醤油一樽を受領して来られた。

その後負傷者で手当の甲斐なく死んでいつた者が日毎に増していつた。あちこちで腐材を積み重ね屍体を焼く煙が立ちのぼつていた。

八月十五日終戦の当日仮本部に全員を集められ、終戦の御詔勅を古屋野教授が奉読せられた時、皆誰ともなく忍び泣きの声が嗚咽の声となり何か諦め切れない気持ちに覆われた。

八月二十二日角尾学長逝去の報がもたらされた。やがて箆島助教授はじめ看護婦さん達に附添はれた御遺体をお迎えし病院玄関正面に安置した。その夜角尾内科一門の方々先生は護られて悲しい第一夜を廃墟の中で過ぎられた。

八月二十四日頃桜町の商工会議所へ、それから九月下旬経専へ本部を移転した。その頃には帰宅した職員や復員者がぼつ／＼出勤し初め、本



省より故山木事務官の後任として白方事務官を迎えた。  
 十一月上旬負傷者の臨時診療所であった新興善小学校に移転、大学は  
 いよいよ復興の軌道に乗った。

文責 田鶴、田中

死亡者名簿(事務関係)

(イ) 事務官	山木 武俊		
(ロ) 庶務係	瀬戸口 国久	深山 芳幹	南里 経次
	松尾 春子	福丸 君子	本多 康子
	佐藤 テルミ	松田 松五郎	浜田 富美
(ハ) 学生係			
	福井 糸一	宮本 秀之進	小村 美智子
	立木 昭子	田中 和子	
(ニ) 教務係			
	原 身武	立川 孝八郎	森野 千都子
	平石 喜美子		
(ホ) 用度係			

山本 正太郎	相川 武夫	赤野 義祐
小川 スチ	村上 トシエ	前川 君枝
林田 静子	執行 信子	土居 ユキエ
早田 マツ子	大塚 ヨシエ	村松 絢子
岩永 サヨ子	帯屋 昌生	
(ヘ) 監査係		
丸勢 徳次	中島 マサ子	小山 幸子
比嘉 ヨシ子		
(ト) 出納係		
本多 成利	桂 和七	石橋 定次
小佐々 チエ子	山田 トミ子	小柳 クニエ
菅 泰子		
(チ) 図書係		
山口 静夫	江崎 ミツ	溝越 親子
馬場 節子	佐藤 弘	永田 熊太郎
(リ) 患者係		
松浦 馬太	佐藤 寅一	山口 武夫
(ニ) 調理所		
尾上 亀次郎	市川 小夜子	山口 武夫
深川 シヅノ	山村 キクエ	深堀 エキ
山下 実枝	中田 ハルノ	川脇 リク
中路 テイ	高塚 アサノ	塩本 キミヨ

林田百合子	福島悦子	堤善吉	(レ) 輔仁会	川口菊太郎	篠崎保一郎	(ク) 小使室	永尾スエノ	(コ) 交換手	松島秀利	土井添竹四郎	羽田卯吉	(カ) 守衛	浜崎力太	早田喜八	西田和一郎	(キ) 機関部	辻栄作	大野多作	(ケ) 機械場	片岡初市	(ク) 工務係
辻義夫	小佐々ノブ子	地本鶴松		横尾久吉	梅津梅吉		深堀君子		龜本近六	原寅一			久保卯喜四郎	池井国松	早田一記		益永弘	小川留八		中村勝吉	
甲斐安太郎	川口貞子	平田マツノ		松坂ミヨ	山野源次郎				黒田福馬	本田五三郎			深堀辰之助	市原啓次	山田今平		山口作太郎	三浦忠雄		岡林周吉	

谷本十三郎	(ナ) 配属将校室	西浦一二	(ネ) 文部省建築課長崎出張所	石川マツミ	片岡アキ	五十嵐サミ	(ニ) 雑使婦	大友ハツ	浜崎ヒサエ	上貞次	(ヒ) 洗濯場	西田利子	山口英一	松尾礼子	永野マサエ	早洩ケイ
岡田醇子		中野伊作		山本タツ	稲尾ツルヨ	稲尾ソモ		中山カネ	吉本サヨ	鈴木勸		松永清	平山春子	松尾恵美	浜岡キヨ子	
山野シゲ子						山崎アサノ			小宮ミチエ	坂元フジエ		西田藤幸	赤羽江静香	深堀久栄	常田千代子	